



樹里安だより

ジュリアン

70
このまでも、これから、
「安行だより」が、喜ばれます。
The 70th Anniversary
of Kawaguchi City

2003年3月
Vol.13



..... 安行八景 (その八)

金剛寺 《川口市大字安行吉岡》

明応5年(1496)に中田安齊入道安行が開基したと伝えられる曹洞宗の寺。墓地には、「安行苗木開発の祖」として知られる吉田権之丞の墓がある。平成14年には境内に権之丞の功績を称えた記念碑が造られた。

長徳寺の カヤ

(川口市芝6303)

芝地区は、市域の北西部に位置している。江戸末期には農間余業から発達した織物業とその関連業種が盛んとなり、昭和30年頃まで活況を呈した。現在は、JR京浜東北線や産業道路(県道川口・上尾線)、国道298号線などが走り、宅地化が進み、市域9地区のうち最大の人口をかかえる。

産業道路から少し入った住宅地の中に、こんもりと繁った緑の丘がある。この丘に鎌倉建長寺末、別格1等地の大智山長徳寺がある。

参道を歩き山門をくぐり抜けると、両側にツツジがきれいに刈り込まれている。階段を上がり総門を過ぎる。すると建て替え中の本堂がでてくる。本堂の衣替えである。本堂の前には巨樹であるヒノキとビャクシンがそびえ立つ。そのまま歩き、右手には三重の開山塔が見える。お線香のにおいを懐かしく感じながら、さらに階段を上り仁王門をくぐると、「やっとでた」という感じでカヤが小高い丘の

一番端に姿を見せた。力強さと優しさが同居しているようなイメージである。崖っぷちに生えているため樹形は斜めになっている。ゴワゴワとした太い根が、しっかりと倒れないように巨大な体を支えている。ゆっくりと近づいてみる。幹はたいへん太い。表面には無数の割れ目が入っている。冷たい雨や風に耐え続けてきたからだろうか、戦い続けた戦士の傷を思わせる。さわってみると、たくましそう外見に反してやわらかい。木のぬくもりを感じる。枝は長くピンとはっていて、深緑で線形の葉がたくさんついている。周囲には若い木々が生えていて、まるで親子のようである。

お寺の方によれば、このカヤの樹齢や由来などは定かではないらしい。しかし何百年もの間、小高い丘の上から長徳寺や芝の街の歴史を、守り神のように見つめてきたのだろう。

参考資料 川口大百科事典

榎



カ ヤ Torreyya nucifera

イチイ科

- 分布: 本州・四国・九州の山地に生える
- 高さ25m~30mになる常緑針葉高木
- 雌雄異株
- 用途: 庭木・境内・建築材・船舶・碁盤・将棋盤など
- 陰樹、日陰でも成育する



4~5月に開花(雄花は黄色の楕円形、雌花は緑色)。葉は厚く深緑色で光沢があり、長さ2~3cmで線形。実は翌年の10月に紫褐色に熟して裂ける。
果実は煎って食べられ、クリなどと同じように山村の人に食料として大切にされていた。

長徳寺の保存樹木

樹種	科名	指定年月日	指定番号	所在	幹周	樹高
カヤ	イチイ	H12.9.1	1	芝6303	3.6m	26.0m
ヒノキ	ヒノキ	H12.9.1	2	芝6303	2.7m	21.0m
マキ	マキ	H12.9.1	3	芝6303	2.8m	17.0m
エノキ	ニレ	H12.9.1	93	芝6303	2.55m	24.0m

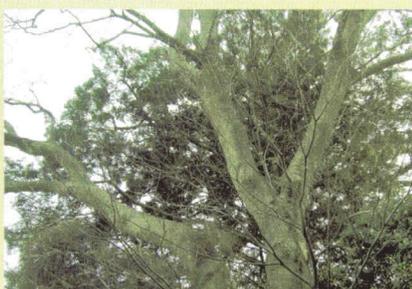
参考：埼玉県指定樹木

ビャクシン	ヒノキ	S12.3.31	-	芝6303	3.3m	13.0m
-------	-----	----------	---	-------	------	-------

ヒノキ

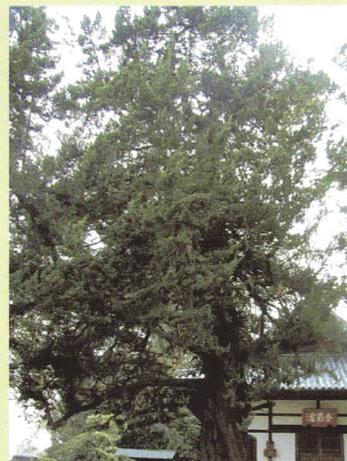


マキ



エノキ

ビャクシン



世界へ羽ばたく安行植木!

フロリアードとは、オランダで10年に1度開催される「花のオリンピック」と呼ばれる国際園芸博覧会のことです。この博覧会は5回目で、2002年4月6日から10月20日までの192日間、オランダのハールレマミーヤで開催され、世界から35ヶ国が参加しました。川口市では、川口市農業青年会議所と共催で、前回(1992年)、前々回(1982年)に続き、3度目の出展となりました。

会場は65ヘクタール(65万㎡)で、『ガラス屋根エリア』『丘エリア』『湖エリア』の3つのエリアで構成されました。

日本庭園は、「1本の木に森を見、わずかな白砂に大海を感じる」といった感性を伝えることをテーマに、『湖エリア』の1,150㎡の敷地に120余種、約1万6千本の安行植木を使って製作されました。『湖エリア』は森側に、滝や水の流れを配した露地風庭園(幽谷の庭)、湖側に白砂に風紋をつけた石庭

(漣紋の庭)を配置して、景観の対比を楽しむことをコンセプトとしました。

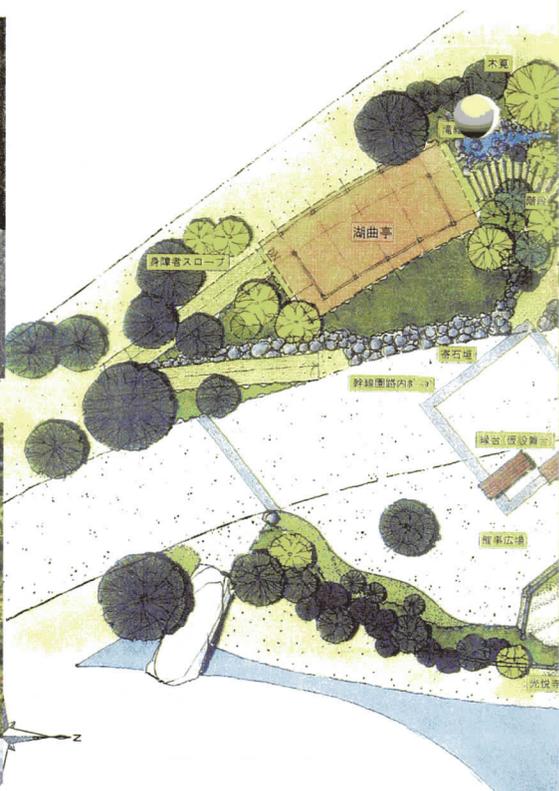
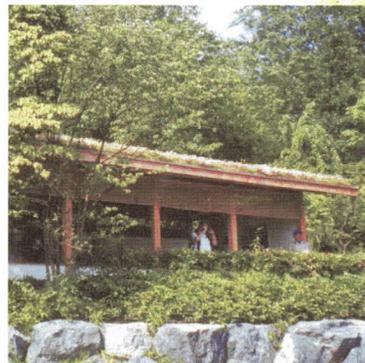
庭園は、周囲の自然とのバランスが意識され、竹溪の門から幽谷の庭に入ると、庭園内は多くの樹木に覆われ、流れや緑陰があり、日本の山奥のような静粛な空間で、石でできた階段を登り湖曲亭に上がると、そこから眺める漣紋の庭は、白砂と岩が湖、対岸の森、空の色と見事に調和していました。

そして、この博覧会の屋外樹木部門に出展した「チャボヒバ」が金賞に輝き、「フィリヤブラン」が銀賞、「マルバノキ」が銅賞で、上位を独占しました。また、日本国土交通省(川口市を含む8つの自治体で共同製作)としてエントリーした日本庭園も、第2位の優秀栄誉賞を受賞しました。

開催期間中は、世界中から約230万人もの人々が訪れ、「川口・安行の植木」の園芸・造園技術の高さをアピールしました。



▲7月16日のジャパン・デーに川口市長が訪れました。



「フロリアード2002」で上位を独占

受賞作品

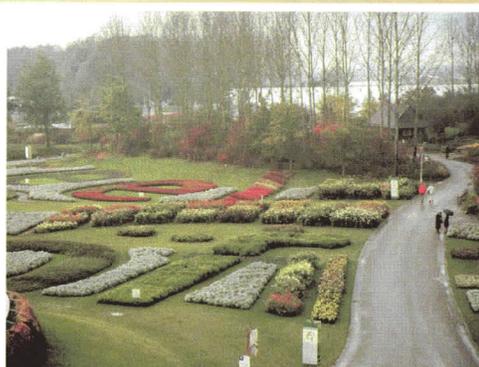
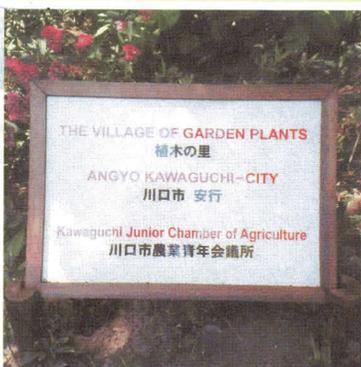
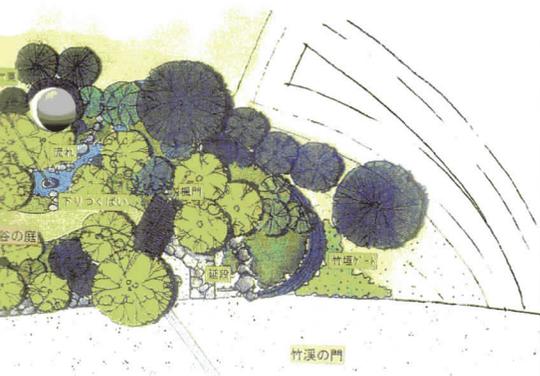
銀賞：フィリヤブラン



金賞：チャボヒバ



銅賞：マルバノキ





安行植木発祥の起源

安行植木の祖 吉田権之丞

没後300年祭記念碑建立

平成14年5月4日

吉田権之丞実行委員会により
安行吉岡・金剛寺に於いて
吉田権之丞記念碑建立並びに
記念祭が行われました。



同時に安行公民館で開催された
「みどりのフォーラム」



◇安行植木開発の祖「吉田権之丞」記念碑文

三百八十年以上の歴史を持つ「植木の里・安行」の植木栽培は、江戸に近かったことや気候・風土等諸条件に恵まれ、その名を全国に知られています。

安行植木の起源は、古文書や詳細な記録が所蔵されていませんが、約三百五十年前の承応年間(1652~1655年)にこの地に住む吉田権之丞が、切り花や植木をつくって江戸に売り出し、「花屋」と呼ばれて安行の名を広めたことに由来すると伝えられています。

権之丞は、寛永十二年四月十九日(1635年)に生まれ、当時の安行は全般に台地と傾斜地あるいは低地が錯綜した地域で、種々の植物や花木が存在していた。そして、権之丞は若い時から草花や花木・盆栽に興味を持っていたと言われ、珍木・草木を集めて栽培したところ土質風土によく適合して生育がよかったと言われ、苗木の開発に当たったことです。

権之丞は安行の植木を明暦三年(1657年)の振袖火事で焼け野原となった江戸の町へ出荷して成功したと言われ、これを機に近隣農家にも広がっていったと伝えられています。

また、当時は江戸時代の象徴とも言うべき元禄文化をわかえ、風流や粋というものを好む風習が流行し、珍木・花木・盆栽などの収集が庶民の間にも普及して、楽しむことが広がったのでした。

そして、権之丞は安行植木の礎を創り、元禄十六年七月一日(1703年)六十八歳の生涯をとおしました。安行吉岡の金剛寺には、その偉業を後世に伝えるべく昭和三十八年八月埼玉県により文化財に指定された史跡「吉田権之丞の墓」があり、その歴史を垣間見ることが出来ます。

この記念碑は、本年が権之丞の没後三百年に正当することを祈念して、地域有志多数の協賛のもとに郷土「安行」の発展と植木産業の振興を期して建立するものです。

平成十四年五月四日
吉田権之丞祭実行委員会





川口緑化センターの主なイベント（結果報告）

新春の寄せ植え展

平成14年11月28日(木)～12月1日(日)

新世代感覚の迎春用寄せ植え鉢の展示販売。十月桜・フキノトウ・寒ボケなどが植え込まれた鉢は、洋間・日本間を問わず、おしゃれなインテリアとして来場者に人気が高かったようです。



フロリアード2002出展記念写真展

平成15年1月18日(土)～1月26日(日)

上位を独占した「フロリアード2002」の作業風景や開催風景などを、写真と受賞したチャボヒバ・ファイリヤブラン・マルバノキなどを中心に、作製した庭園の展示を行い、来場者に受賞を広く周知しました。



雪割草と山野草展

平成15年3月15日(土)～16日(日)

早春の太陽のきらめきをいち早くつかんで、山里などに他の植物に先駆けて咲く雪割草。花色や咲き方の千変万化は見事の一言でした。



スプリング緑花感謝祭

平成15年3月22日(土)～23日(日)

川口緑化センター開館7周年を記念して開催され、抽選会、植木・花の大セリ大会、餅つきなどが行われ、来場者は暖かい春の一日を過ごしました。



日本フラワー&ガーデンショー出展

平成15年3月21日(祝)～23日(日)

東京ビッグサイトで開催される、日本で最大規模の園芸イベントである「日本フラワー&ガーデンショー」に市内緑化団体と共に出展しました。3m×6mのスペースに五葉松・チャボヒバ・姫シャラなどを使用した日本庭園を作製し、安行の園芸と造園の技術の高さをPRしました。





さくらそうについて (その二)

- ★ 四芽植え : サクラソウの花芽を1鉢に4芽植えること。サクラソウは、江戸の昔から、1鉢に花芽を4芽植え、やがて4本の花茎が立ち上がり、開いた花と、良くしまった薄緑色の葉、くすんだ孫半斗瓶を併せた全体が観賞されてきました。決して「4」という数字が嫌われた訳でなく、むしろ4本立ち上がった状態での開花が最も美しく見えたのでしょう。
- ★ 孫半斗瓶 : 江戸時代、サクラソウ栽培に使用されていた鉢の名前。現在では、作られていません。サクラソウ愛好者は、孫半斗瓶に似た鉢を使っています。孫半斗瓶は、本来鉢ではなく、焼物の型枠でした。従って底には穴はあいていません。そのため台所で味噌の容器としても使われていました。穴はサクラソウ愛培家があけて使っていました。サクラソウは、寒さには強いが、暑さには弱い性質を持っています。孫半斗瓶は、焼物としてはもろいが、肉厚で多孔質であるため、サクラソウ栽培には、うってつけでした。一度は、この鉢を使って栽培してみたいものです。
- ★ 連 : 今でいうところの、趣味の会に相当するものです。幾つもの「連」が生まれましたが、連同志の交流は一切無く、閉鎖的でした。従って、連で発表したサクラソウ品種は、いわゆる門外不出で、他の連に普及する事はなく、かなり厳しい締め付けがありました。この事が、将来「同種異名」の混乱のもとになりました。また、連の会合は、茶と菓子のみで決して酒席にかわることはなく、きわめて地味な集まりであったと、「桜草作伝法」に出てきます。
- ★ 桜草花壇 : サクラソウの花を美しく、しかも長持ちさせて観賞するために、江戸時代に考え出されたサクラソウを飾る小屋のことです。サクラソウの開花は、平年ですと4月の20日前後です。この頃の気象は不安定で、よく春嵐があります。サクラソウは、葉も花も風雨に痛みやすく、少しでも長く観賞できるように考え出されました。雛壇上に立体的に飾ったサクラソウは、更に美しく見えるものです。
- ★ 桜草作法伝法 : 天保の頃(1830年代)に著されたサクラソウの専門書です。サクラソウの来歴、用土のこと、肥料のこと、品種改良のこと、その他栽培上気をつけることが事細かに記されています。現在でも充分に通用する内容です。江戸時代の園芸の質の高さが改めて理解できます。



ジュリアン

樹里安

川口緑化センター・道の駅「川口・あんぎょう」

発行日：平成15年3月31日

発行：財団法人 川口緑化センター

〒334-0058 川口市安行領家844-2

TEL 048-296-4021

ホームページ：http://www.sainet.or.jp/~jurian/

きらり川口 緑いっぱい